

論文審査の結果の要旨

本論文は、唐代の徐靈府によって撰述された「天台山記」の現存唯一の写本を取り上げ、厳密な校訂と解説を行うと共に、この山岳地誌の持つ文献学的な性格や内容上の特徴、さらには思想史的意義について考察を行ったものである。

「天台山記」の現存するテキストは、我が国の国立国会図書館所蔵の写本が唯一のものであるが、誤記も多く、異体字も数多く使用されていることから、従来このテキストを基にした『古逸叢書』本や『大正新脩大蔵経』本などによっても十分な読みがなされてこなかった。本論文は精確な翻刻と綿密な校勘作業を行うことによって、従来よりはるかに正確なテキスト作りを目指しており、ほぼその目的は達成されたと言える。今後、「天台山記」を使用する際には、先ず本論文のテキストから出発しなければならない。本論文の功績として高く評価される点の一つである。

さて、本書は二部より成る。「第一部 研究篇」は、全九章にわたって、「天台山記」を様々な角度から解明したものである。天台山の地理と歴史に関する記述から始まって、本記の題名、撰者、記載記事の検討、その流伝経緯の検証などがなされている。また、天台山の寺院や道観について、個別的に考察すると共に、山麓にある寺観と山中にある寺観との役割や性格の違いについても明らかにしている。論者はこうした検証を行うに当たって、地誌や関係詩文を渉猟し参照すると共に、実際に現地を足運び、地理的状况について確認するという作業を丹念に積み重ねている。本論文は文献による考証にとどまらず、実地検証を伴うことによって、諸問題の解明に説得力を与えている。論者の研究姿勢の中でも評価されるべき点と言える。

また、第一部第七章の「『天台山記』所収の王羲之の習書説話」では、従来殆ど取り上げられていない王羲之説話について考証がなされており、今後、書道史や文学史の研究において注目されることになると言えよう。

本論文の「第二部 本文篇」では、テキストの綿密な考証・校訂が行われた上で、本文の確定がなされ、それに基く訓訳（書き下し文）が作られ、更に丁寧な口語訳がなされている。その間に、固有名詞や語句の注釈や典故が詳細に記されているほか、他書への引用も丹念に調査されている。

国立国会図書館所蔵の「天台山記」は、重要文化財として指定を受けているが、従来これほどまでにテキストに密着した形でその内容が研究されることはなかった。本論文は「天台山記」の研究にとって画期的な功績を果たしたものと言えよう。ただ、論者の如上の努力にも関わらず、幾つかの個所がなお「意味不詳」という形で残され、ために完全な翻訳にまで至らなかったことは残念ではあるが、唯一の写本テキストという制約からすれば致し方ないことかも知れない。完訳が出来る日を期待したいが、現在のところ論者の校訂版とその訓訳・訳文が最善のものであることに変わりはない。今後、論者の研究成果に基づいて、天台山宗教史の総合的研究が行われることが期待される。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認める。